

## 令和6年度「不登校に関する研修会」(第3回) 講義記録

- 1 日 時 令和6年8月8日(木) 10時から16時
- 2 場 所 県立総合体育館
- 3 講 師 奈良女子大学 伊藤 美奈子 教授
- 4 テーマ 「思春期と不登校」
- 5 内 容

### (1) 思春期について

- ア 思春期の揺れ動き(情緒面)
  - ・多感になり、気分の変化が激しくなる。
  - ・陽気と陰気、社交と孤独、自信と卑下などの間を激しく揺れ動く。その変動に理由はなく自分でも説明できないため、独りよがりに見えるところがある。
- イ 思春期の揺れ動き(意識面)
  - ・自分のことが「他者の目」を通して客観的に見えるようになる。
  - ・人との比較の増加、自分の理想とのギャップ、周りの反応の変化などの要素が重なり、自己否定、自己嫌悪、アイデンティティの模索をするようになる。
- ウ 思春期の揺れ動き(友人関係)
  - ・中学生を中心に、「友だちだから気を遣う」「嫌われたくない」「友だちの輪から外れたくない」と思うようになる。
  - ・「孤独」より「一人であると見られる」ことへの恐れから、「いじめられても一緒」を求める気持ちを持つようになる。
- エ 思春期の揺れ動き(親子関係)
  - ・幼少期は体力的・経済的・社会的にも「タテ関係」である。
  - ・思春期になると、体はほぼ並びになり、上から視線を嫌がる。反抗することにより、「かりそめのヨコ関係」になる。
  - ・思春期が終わる頃になると、子どもの成長により、反抗する必要がなくなる「真のヨコ関係」になる。
  - ・反抗期とは親子の関係を縦から横に変えていくものであり、反抗期の有無よりも親子関係の質的变化が大切である。
- オ 思春期はSOSを出すのが下手
  - ・子どもじゃないというプライド、大人への反抗心、どうせ言ってもという不信、甘えなどにより、思春期は言語化がスムーズにいかない。
  - ・言語化できない悩みは心身症という形での「身体化」、問題行動という形での「行動化」で表れる。行動化には自傷行為、オーバードーズもある。その子に合う関係機関につなぐことが大切である。
  - ・思春期は大人臭さ、支援臭さを嫌う。

### (2) 不登校とその支援について

- ア 多様化する現代社会における不登校
  - ・友だちや教師との人間関係、いじめ、発達的な偏り、学業の難しさ、様々な精神病理、自傷、感覚過敏、ゲーム依存、性的マイノリティ、虐待、貧困、ヤングケアラーなど不登校の背景には多様な問題がある。

- ・複数の目によるアセスメントと複数の手（他職種）による支援が必要である。
- イ 手がかりの少ない不登校
- ・休んでいる間にどのようなことがあれば学校に戻りやすいと思うかは、「特になし」が最も多い。
  - ・学校を休んでいた時に相談した相手は、「家族」が一番多く、「誰にも相談しなかった」が二番目に多い。
- ウ 過剰適応の子どもたち
- ・過剰適応とは、個人の内的な欲求を無理に抑えてでも外的な期待や要求に応える努力を行うことである。
  - ・外面は適応的な「よい子」、内面は「ストレスや抑うつ、自己不信」であり、ぎりぎりの状態で登校しているため、突然破綻し、息切れ的に不登校になることもある。
- エ 不登校をアセスメントするには
- ・「声にならない声」を聴き取る必要がある。そのためには、普段の健康観察と小さな変化に気付く力が必要である。そして、情報を共有することが重要である。
  - ・チームとして校内の多職種の力を活かし、ケース会議などによる丁寧なアセスメントが必要である。
  - ・家庭や学校外の専門機関との連携が必要である。
- オ 教育機会確保法のポイント
- ・不登校というだけで、問題行動とみなしてはいけない。「問題じゃない」のは子ども自身であるため、支援は必要である。
  - ・学校復帰がすべてではないが、学校復帰を望む子には復帰の道を用意する。
  - ・学校そのものが安全・安心な場であることを大前提にした上で、学校外にも多様な学びの機会を保障することが大事である。
  - ・支援のゴールは社会的自立であり、その自立への最初の一步は実に多様である。その子にとって何が最初の一步になるか考えていく必要がある。
- カ 不登校との関わり
- ・先生にもいろいろな不安や悩みがある。先生を支えること、先生を孤立化させないことが大切である。
  - ・先生だからこそできる関わりがある。
- キ 保護者を支える
- ・決して親に原因があるのではないが、「親が変わる」と「子どもが変わる」は円環関係である。
  - ・保護者が支援につながることで、保護者支援を広げることが大切である。
- ク 不登校支援の今後に向けて
- ・「学校無用論」の前に、みんなが安全で安心に、学びたいときにいつでも学べるという、あるべき学びの場について考える必要がある。
  - ・不登校のうち、どこにもつながっていない児童生徒が4割いる。不登校の子ども、保護者、そして担任を孤立化させないことが必要である。
  - ・「見える化」するための、教師と子どもの関係構築と、見えたものの「共有」と「連携」が必要である。

（記録：県立但馬やまびこの郷）